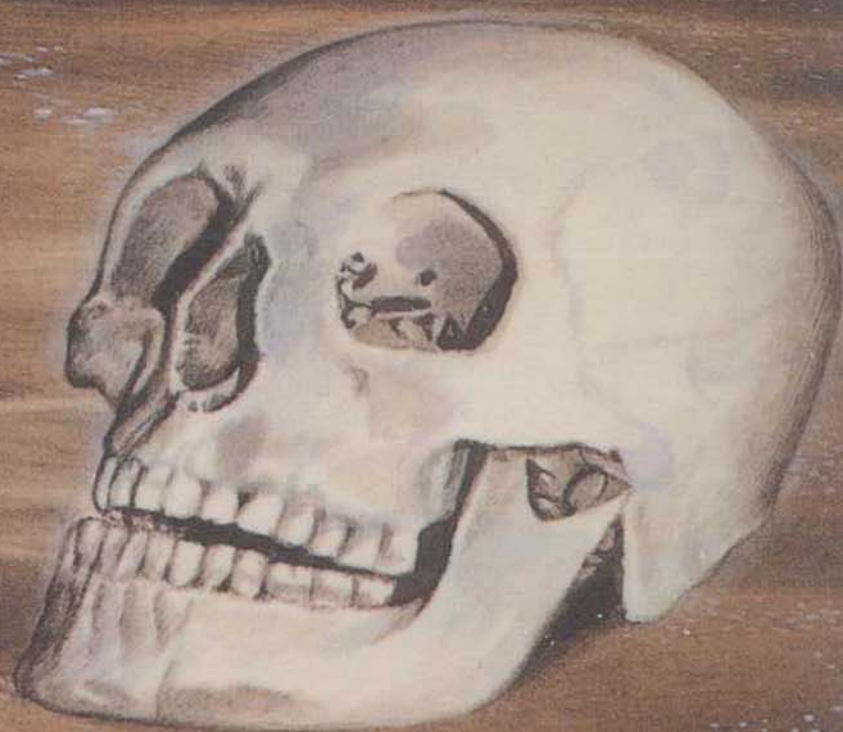


夏樹静子
懇切な遺書



250413

I313.45
J6545

2313.45

6545



集英社文庫

こんせつ いしよ
懇切な遺書

1990年4月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 なつ き しず こ
夏 樹 静 子

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
会社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6393 (販売)

(230) 6080 (製作)

印刷 株式会社 廣済堂

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

©S. Natsuki 1990

Printed in Japan

ISBN4-08-749571-X C0193

集英社文庫

懇 切 な 遺 書

集英社版

目次

懇切な遺書……………五

心のデッドスペース……………二

解説 郷原 宏

懇切な遺書

1

冷たい初冬の雨が、枯れたまま枝に残っている街路樹のプラタナスの葉をたたいていた。東京農芸大学は、新宿の繁華街から西へ山手通りをこえた、雑然とした住宅地の一画を占めている。

十一月二十八日午前八時半、いつも通りの東京のあわただしい朝――。

道路からさほど奥まっではいない鉄筋校舎の一階へ、出勤してきたばかりのパートの掃除婦塩崎ハツが箒ほうきやバケツなどの道具を下げて入っていった。

ほの暗い廊下はまだひっそりとして、冷え冷えした空気には薬品の臭においがしみこんでいる。

毎朝の手順通り、彼女は生化学教室のドアの鍵穴かぎあなへ、鍵束についたキイの一つをさしこんだ。――が、ドアに鍵はかかっていなかった。

昨夜最後に帰った人がかけ忘れたのだらう。

珍しいことでもないので、彼女は気にもせずドアを開ける。

中は実験室である。大学のふつうの教室より少し狭いくらいの室内には、大小さまざまな分析器械やコンピュータ、書棚や薬品棚、冷蔵庫等々が所狭しと置かれている。

その奥に助教授室のドアがある。そのドアも今朝は半分開いていた。

助教授室から掃除を始めるつもりだった彼女は、そちらへ歩いていったが、途中で「あれ」と呟いて足を止めた。助教授室の手前の片隅には古ぼけた応接セットが置かれているが、そのソファの上で男が寝ているのだ。俯せになって、かろうじてソファにしがみついているような危っかしい恰好である。

見憶えのある黒白のツイードの上衣、身長百八十センチ近くありそうな大柄な体軀は、この教室の大屋助教授らしい。

「先生、こんなところで……風邪ひくじゃありませんか」

彼女は大屋の肩に軽く手をかけて起こそうとした。拍子に、彼の身体はゆらりと床に落ちて仰向けになった。

塩崎ハツの口から小さな悲鳴がもれたのは、その何秒かあとである。大屋の顔は蒼白で、うすく白眼をむき、唇からは多量の涎があふれ出ている。コンクリートの床に落ちてても声ひとつたてず、まるで物体のような無反応さに、ただならぬものを覚えた。

「先生……先生！ どうなさったんですか！」

彼女はなおも大屋を揺り起こそうとしたが、その身体は何か異様に硬直している。息遣いも感じられない。

ハツは息をのみ、動転した目で周囲を見廻した。

ソファの傍^{かたわ}らのテーブルの上には、オレンジジュースのようなものが入ったグラスが一つづつあった。ジュースは七分目ぐらい飲み残されている。

ドアが半開きになった助教教授室の内部が、彼女の網膜にうつった。デスクは比較的きれいに整頓^{せいどん}され、真ん中に白い紙が置かれている。ある種の本能が彼女をそこへ引き寄せた。ワープロで文章が打ちこまれていたが、一番上の文字が彼女の目にとびこんだ。

〈遺書〉――。

つぎの瞬間、彼女はわけのわからない叫びをあげながら実験室を走り出ていった。

2

一一九番への通報により、十分後には新宿消防署の救急隊員が到着した。

彼らはすぐに大屋助教教授の死亡を確認して、所轄の代々木警察署へ連絡した。

さらに十五分ほどして、代々木署刑事課の捜査員三人が駆けつけた。

刑事一係長の山種利昭^{やまたねとしあき}警部が、大屋の遺体^{あつた}を検め、発見者塩崎ハツから事情を聞いた。

「あそこに遺書が……あたしは触ってませんけど」

山種もすぐには手を触れずに、デスクの上の一枚の紙に見入った。ワープロの横書きで十行ほど打たれ、末尾に万年筆でサインしてある。

へ遺書

私、自らの意志により、十一月二十七日午後八時四十分、テップー〇〇ミリグラムを服用いたしました。致死量ですので、遅くも今夜半までには絶命するものと思われます。お手をかけてあいすみません。原因は私なりにありますが、一言で申せばノイローゼということでしょうか。無用の誤解をさけるためにしたためました。

大屋博司

サインだけは肉筆だが、その字は少し乱れているように見えた。

「監察医務院へ連絡して——」

山種が若手刑事に告げた。都内で発見された変死体は監察医務院の医師によって検屍され、犯罪と関わりなければそちらで解剖されることになる。

「事務所の電話で掛けてきます」

刑事は助教授室のデスクの上の電話機にチラと目を投げてから答えた。

「家族へも報らせてくれ」

廊下がしだいに騒がしくなってきた。九時をすぎ、大学の職員や学生たちが出てきて、事件を聞きつけたようだ。

山種は、集った人々の中で、日頃とくに大屋と親しかった人や、昨日彼といっしょだった人がいたら話を聞かせてほしいと呼びかけた。

すると、倉田くらたと樋口ひぐちと名乗る男女の学生が前へ出た。

「ぼくたち、大屋先生のゼミの者です。昨日は夕方六時四十分頃まで先生といっしょにいたんです」と倉田。

「六時までここで実験をしてて、それから、先生と、もう一人の学生と四人で、山手通りの向かいにある喫茶店までお茶を喫のみに行ったんです」と、女子学生の樋口がうわずった声でいう。二人とも、今はソファの上に横たえられ、ありあわせの布を顔にかぶせられた大屋に、怖わごわのような目を向けている。

「ぼくらはうちへ帰るとこだったから、コーヒーだけで、先生はまだ研究室に残るといわれて、スパゲッティを注文されました。それを食べ終られたあと、六時四十分ごろ店の前で別れたんです」

「それで助教授は？」

「また大学のほうへ戻っていかれました」

それからちょうど二時間後に、彼はへ自らの意志により、毒を呷ったことになる。

「昨日、最近でもいいが、大屋先生には何か変わった様子がありましたか」

「いや、それが、今思い返してみても、これといって……」

倉田は首をひねる。

「日頃から、わりと静かな方でしたから……でも、冗談いう時もあったけど」

「やっぱり、草薙さんのことが心にかかってらしたのかしら……」

樋口が呟き、え？ という眼差で山種が見返した時、再び廊下がざわめいて、男女二人が駆けこんできた。

「大屋です、大屋慶子……家内です」

先に立った女性が口走るようにいう。年配は三十七、八歳、明るいグリーンジャケットを羽織り、造作のはっきりした顔に洒落たメタルフレームの眼鏡をかけている。

「ああ、奥さんですか」

「今自宅で電話を受けまして……」

「本町六丁目で、奥さんは産婦人科の医院を開業しておられるんです」

後ろに立った男性がことばを添えた。本町六丁目ならここからほど近い。

山種は女医である妻を遺体のそばへ連れていった。

顔の布をはぐって見せると、慶子は一瞬激しく表情を歪めたが、唇をかみしめて感情を抑えているようだ。

山種は遺書も彼女に見せた。

「ノイローゼと書かれてますが、神経科にでも通院されてたんでしょうか」

「いえ、それはなかったと思いますけど……いろいろ悩みは抱えていたようです。でもまさかこんなことを……」

絶句すると、大きな眸に涙を滲ませた。

「このサインは、もちろんご本人の筆跡で……？」

「はい、ちょっと乱れてはいますが、まちがいないと思います」

遺書に見入って、呆然としてゐる慶子をその場に残して、山種は遺体のそばへ戻った。

慶子といっしょに来た四十すぎくらいの長身の男が、大屋の死顔を眺めていた。

「あ、ぼくは池谷といって、相模医科大学の教授をしています」

山種の問いかける視線に合うと、自分から名乗った。

「大屋君とは東京の大学の同期で、現在も共同研究をやってました。今朝もそのことでこちらへ来たら、偶々校舎の入口で奥さんと会いまして……」

「大屋先生はおいくつでしたか」

「四十三になっていたはずです」

「今度の自殺には、思い当る節ふしでもおありになりますか」

「うむ……」

池谷は現代風のちよつとニヒルな感じのする顔を引き締めた。

「多少神経質な、線の細いところはあったですがねえ……」

「テップというのはどういう薬です？」

「ふつう農薬として市販されてますが、リンの有機化合物で、猛毒ですね」

「この研究室にあるでしょうか」

「実験用に常備してあったと思いますが……」

彼は応接セットとは反対側にある薬品棚へ歩み寄った。

「ああ、あれですね」

彼は茶色のガラス瓶びんを指さしたが、それはほかの瓶より少し前に出ていた。

「これをオレンジジュースに混ぜて……苦しんだだろうなあ」

池谷は眉間みけんに深い皺しわを刻んで瞑目めいもくした。

監察医務院から、監察医の北坂満平が到着したのは、連絡から四十分ほどたった頃である。

北坂満平は今年四十五歳、都内の大学の法医学助教授であり、東京で三人いる警視庁嘱託医をつとめている。嘱託医は、特捜本部がつくられそうな難事件が都内で発生した場合、真っ先に連絡を受けて現場へ赴き、検屍を行う役割を委嘱されている。

また彼は、週に一日は監察医務院へ出ており、今日は監察医としてこちらへ来たのだった。

身長百六十五センチくらいの小柄で痩せ型。半白の髪に、目尻の下った好人物そうな風貌の彼は、屈強な山種警部のそばに立つといささか貧相にさえ見える。が、山種は「ご苦労さまです」と、丁重な態度で彼を迎えた。山種は過去二回ほど、事件を通して北坂と付き合いがあり、彼の正確な検屍はもとより、事件や人間に対する洞察、それにそこはかたない温さを感じさせる人柄などに敬意を抱いていた。

「どうも先生、お手数をかけます。遺書がありました、覚悟の自殺らしいんですが――」

北坂は頷いて、さっそく検屍にとりかかった。

眼球、口腔、顔面、それに全身状態などを慎重に検めた。

「毒物死にはまちがいないようですね。死後十二時間前後でしょう」

「薬も遺書に記されてまして、オレンジジュースに混ぜて飲んだ模様なのです。発見時はこのソファに俯せになっていました」